

立川西岸の洪積台地、ならびにその裾部分に位置している。既往の発掘調査でも、木簡・墨書土器などが出土している（高畑廃寺。本誌第五号）。第一七次調査は、道路新設に伴うもので、二〇六四²m²を調査した。その結果、古代の大溝、中世の水田遺構を検出した。

1 所在地 福岡市博多区板付六丁目

2 調査期間 第一七次調査 一九九八年（平10）九月～一九九

九年三月

3 発掘機関
福岡市教育委員会

4 調査担当者 大庭康時

5 遺跡の種類 大溝・水田跡

6 遺跡の年代 八世紀～一三世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

高畑遺跡は、福岡平野を北流する御笠川西岸の洪積台地、ならび

古代の大溝は、調査区西側の中段丘に沿って流れていたもので幅八・五～一一・五mを測る。周辺の既往の調査成果からみて、人為的に掘削された可能性がある。掘削時期は八世紀前半で、一〇世紀頃に埋没したと考えられる。

(1)は、大溝埋土の中心位、九世紀代の堆積層から出土した。九世紀代の流路に属する。大溝から出土した遺物には、一〇世紀代の上層から「子」と墨書した土師器、木製人形が、九世紀代の中層から「什」「田」「下」の墨書土師器、墨書須恵器（判読不能）、人面墨書土器、絵馬が、八世紀前半以降の下層からは「常陸」「原」などの墨書須恵器、人面墨書土器などがある。

(2)は、中世の自然流路のうち、一一世紀以降一四世紀までの間に堆積した砂層中から出土した。

8 木簡の釈文・内容

古代の大溝

[illegible]

利進填事

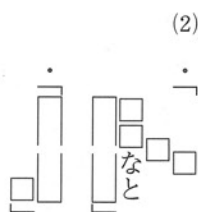
10

[米力]					

令勘乙成
事狀以解
天長五

$$(359) \times (57) \times 3 \quad 081$$

中世の自然流路



78×(46)×0.3 081

(1)は緩く湾曲した縁辺に沿って、二孔一対の穿孔があるので、折敷の底板を転用したものと思われる。遺存部位からみて、冒頭と末尾のそれぞれ二行分が残ったものである。墨書は、比較的鮮明だが、判読できない文字が多い。天長五年（八二八）の紀年をもつ稲の損失の補填に関わる大振りの文書木簡であるが、断簡のためまとめた意味を読みとるには至っていない。

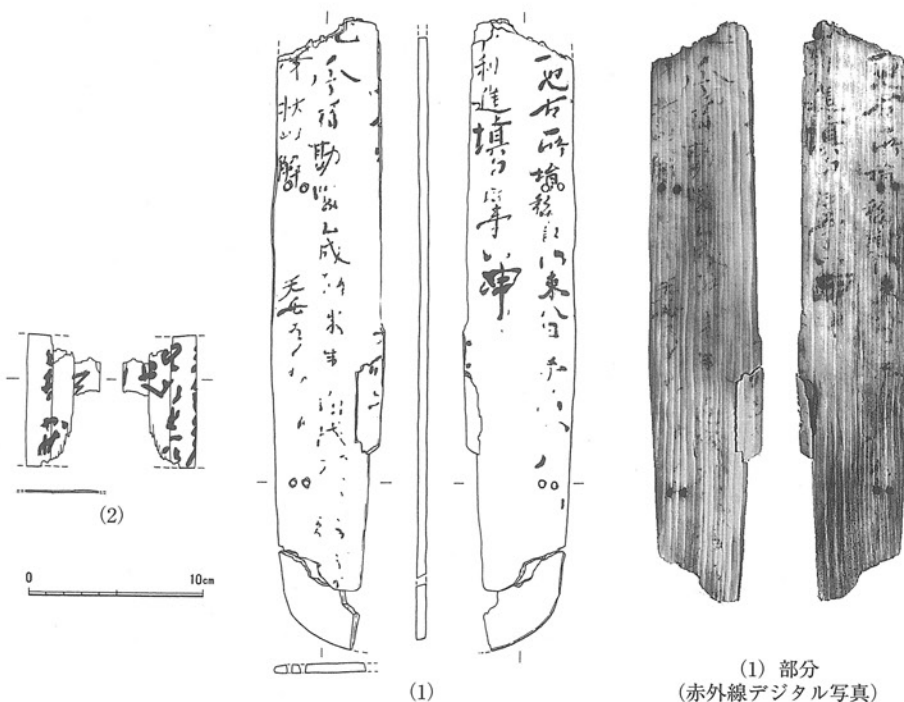
(2)は檜の柁目材である。上・下端は遺存するが左右は欠失し、本来の形状はわからない。墨痕は鮮明だが、ほとんど釈読できない。

なお、釈読にあたっては、九州大学の坂上康俊氏、山口大学の橋本義則氏のご教示を得た。

9 関係文献

福岡市教育委員会『高畑遺跡一七次』（福岡市埋蔵文化財調査報告書六七六、二〇〇一年）

（大庭康時）



(1) 部分
（赤外線デジタル写真）